『おかえりなさい』

香月作品3点 ふるさとへ

「より多くのファンの方々に
見てもらいたい」
山梨県の佐々木満里子さん

The message from
Museum of Misumi
～美術館からのメッセージ～

町長からの感謝状

過る9月14日、山梨県の会社社長、佐々木満里子さんから、香月画伯の絵画3点の寄贈がありました。

寄贈された絵画は、油彩「露草」（4号）と素描「山つつじ」、版画「なずな」で、いずれも亡き母睦子さんが30年前からコレクションしたもの。「画伯の絵は、個人で持つにはエネルギーが強すぎる」との友人の意見もあり、今回の寄贈となったようです。

踊る画伯（タヒチにて）

神秘に満ちた生命の鼓動を聴きながら

〈私の〉旅タヒチ展

平成9年10月4日(土)～平成10年2月15日(日)

南太平洋ポリネシアにあるフランス領タヒチ島は、ヨーロッパ人による発見が最も遅かった島である。香月はこの島に夫人同伴で二度訪れた（1971年と1973年）。

島の政庁その他の機関がある中心地パペーテは、ヨーロッパ化がはなはだしくて香月の期待を裏切ったが、ゴーギャンが生活していたマタイエア付近は、まだ昔の面影を留めていた。特にゴーギャン小屋の残っているあたりは、汚染されない原初の静かさとでもいうものが残されていた。

かつて香月が見たエーゲ海も美しかった。とはいえ砂浜には貝殻も海綿も見当たらず、打ち上げられた廃油ボールだけが目についた。「死んだ海だ」と香月は感じた。エーゲ海に比べればタヒチの「海は生きている。ということは、人間も生きているということではないか」と思った。

海岸の浅瀬に黄金色のカヌーが見え、陸上の椰子の木陰や家の脇では、人や鶏や犬がのんびりとすごしている。

そこには午後の陽光を背景とした島の生命の、原初のままの歓びがあった。神秘ないのちの鼓動と色と形に魅せられた香月は、クレヨンの軽快な線と水彩を駆使して、豊かな風物を鮮明に描いたのである。素朴さ、明るさ、理想境としての自然と調和と雰囲気は、無駄のない鋭いタッチから力強く産み出された。

タヒチの旅のスケッチは、1972年に香月泰男スケッチ集〈タヒチ篇〉として発刊され非常な人気を呼んだ。

この度はその画集の作品原画も含めて展示いたします。ご鑑賞下さい。

―次回予告―
〈私の〉野花展